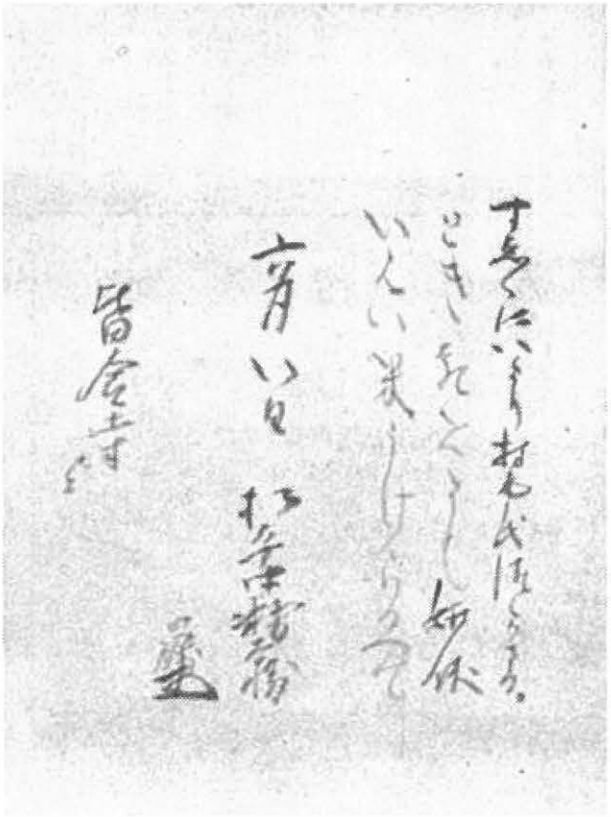
Lord Masakatsu Matsudaira,
adored by the people

人々に慕われた松平昌勝公

松平昌勝公の書（まつだいらまさかつこうのしょ）



目次

松岡藩と初代藩主松平昌勝公 …… 04

松岡藩城下町の様子 …… 06

今ものこる十二曲り …… 07

松岡藩の産業 …… 08

松岡藩の人々のくらし …… 09

天龍寺 …… 10

天龍寺御像堂 …… 11

御像祭り …… 12

天龍太鼓 …… 14

松平昌勝公顕彰会 …… 16

町にのこる史跡 …… 18

編集後記 …… 19

初代藩主松平昌勝公と松岡藩

生い立ち

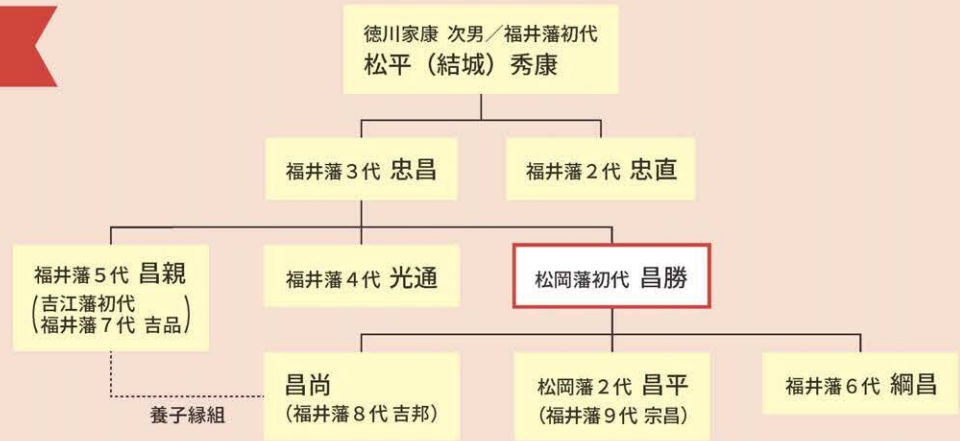
江戸時代前期の1636年、越前福井藩主 松平 忠昌の子として松平 昌勝が生まれました。天保2年（1645）昌勝公9歳の時、五万石をたまわり、藩主として指名されて松岡藩ができました。

1648年には、かつて芝原庄と呼ばれたこの地に館や城下町の建設を始めました。昌勝公はこの地に深い愛情を持ち、武将としてのリーダーシップと優しさを兼ね備えていました。後の由利 公正の家系を復興させたのも昌勝公でした。

昌勝公の人柄

昌勝公は、家臣を大事にし、領民にも気さくな人でした。乗馬などの武芸・相撲・水泳・川狩り（網や道具を使って魚を捕まえること）・和歌なども好んだとされています。川狩りは大規模なもので、士族ほか町民・農民などが総勢500人ほども集まって行われていました。川遊びも度々行い、得意の水泳を楽しみました。そこでは、お供のものだけではなく、近くの農民も招かれ、昌勝公も百姓も武士も分け隔てのないつきあいでした。

家系図



松平昌勝公顕彰会事務局広報紙（平成13年9月発行）より

御像祭りのはじまり

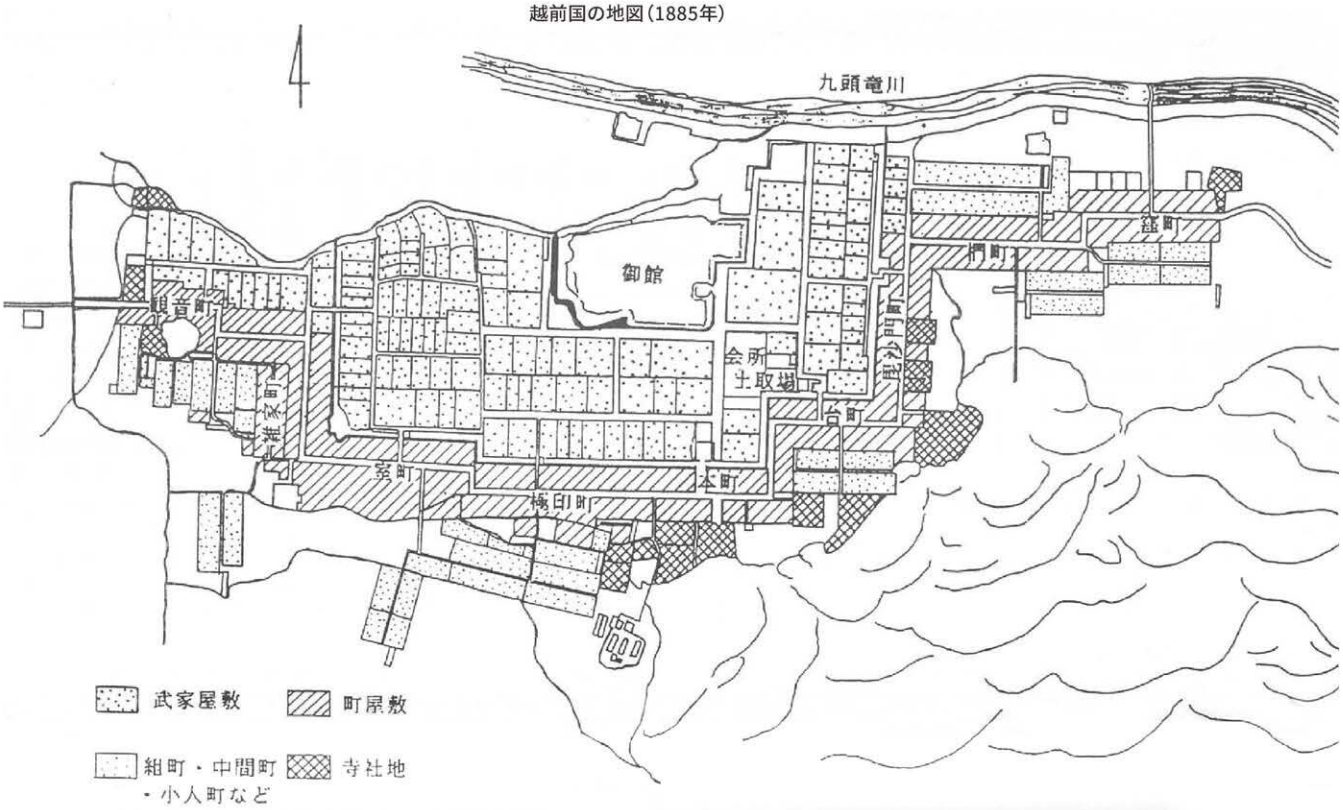
昌勝公没後100年（1792）に、当時の天龍寺（祖母 清涼院の菩提寺）住職や有力町衆は福井藩の許しをもらって、「昌勝公」の「御像」（木造の像）を制作し、その遺徳を偲んで、命日の8月27日に「御像講」が行われたのが、現在も開催されている「御像祭り」の始まりです。この日だけ昌勝公の「御像」が公開されます。「御像祭り」は230年以上も続いていて、地域で一番大きな祭りになっています。この祭りは、地域の人たちにとって大切な行事であり、長い歴史を持っています。

松岡藩城下町の様子

松岡藩の藩域は、旧 吉田郡を中心に大野・足羽・坂井・丹生・今立・南条の旧7郡130村に及んでいました。関ケ原の戦いから50年近くたって平和な時代に入っていたので、城の建設は許可されず、藩主の館のみの建築が許されていました。

藩ができたとき、武士の館が165戸、医者の屋敷が18戸など、全部で250戸の館や屋敷が建てられました。その周りには勝山街道を大通りとして、藩主や家臣団の生活を支える店や町民が暮らす町をつくりました。城下町は区割りされ、窪・椚・毘沙門・台・本・極印・室・観音の松岡八町といわれる八つの町でできていました。

越前国の地図（1885年）

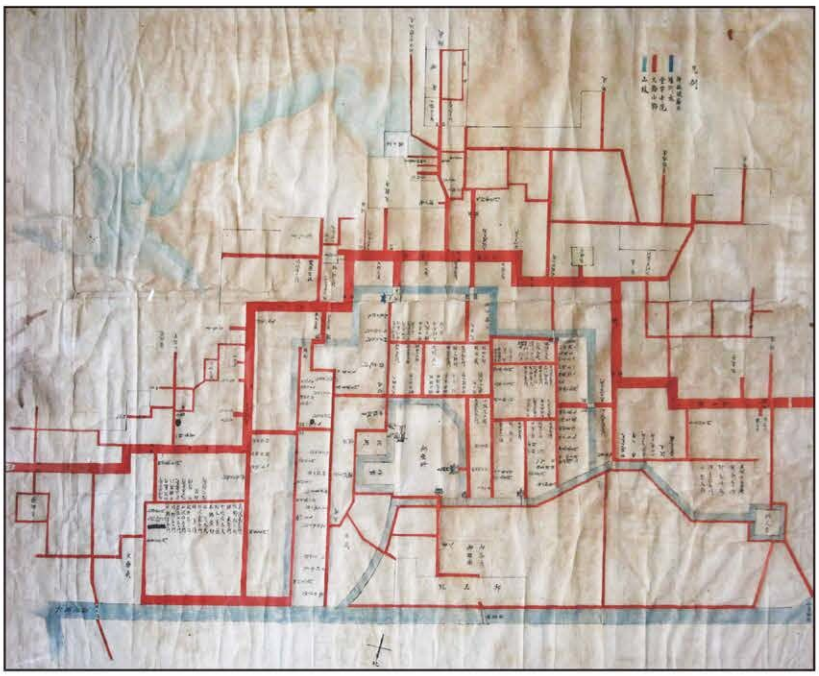


今ものこる十二曲がり

昌勝公の館跡の周りには、松岡藩時代の大通りである勝山街道（現旧勝山街道）がほぼそのままの形で残っています。

この旧勝山街道は、何度も直角に折れ曲がる「鍵の手」と呼ばれる道筋で、その曲がり角の数から「十二曲り」と呼ばれています。

この道筋には、お寺や造り酒屋が多くありました。今でも江戸時代の雰囲気を感じられる町なみです。



明治頃の古地図

十二曲りの位置と役職別居住地

松岡藩の産業

松岡藩は、地域資源や周りの環境に合わせた産業が発展し、特に農産物や竹、鉄、陶器などの地域資源を活用して地元経済を支えていました。

主な商品や商い

鋳物

松岡町には「芝原」という地があり、ここにはかつて「鋳物師」と呼ばれる職人たちがいました。松岡の鋳物産業は奈良時代が起源で、奈良朝廷より松岡の鋳物師に与えられた「養老の御牒」という古文書が残っています。

鋳物師は今でいう皇居の仕事なども受けていた特別職だったので、「鋳物師」と名乗るには許可証が必要でした。社会的にも高い地位が与えられ、尊敬もされていました。芝原鋳物師に関する有名な伝説として、奈良時代に源頼政がぬえを退治した際、芝原の灯籠の火だけが消えなかったというエピソードや、石川五右衛門を処刑する際に使われた大かまが松岡で作られたという逸話があります。芝原鋳物師が実在していた証拠として、南北朝時代や永正時代、大永時代に鋳造された梵鐘がいくつか現存しています。

松岡藩時代には、藩の家老屋敷に「なべ売坂」と呼ばれる道があり、なべや釜を売っていた商店が軒を並べていたそうです。「なべが松岡か。松岡がなべか。」と言われたほどでした。

明治維新後には、近代化により交通整備が進み、他の地域の工場に仕事が奪われました。芝原鋳物師の多くが職を失うこととなりました。

鐘（運生寺 梵鐘）

刀鍛冶

刀や農具を作る仕事です。特に江戸時代中期以降には、戦いが少なくなったため、農家の人々が使う農具を作ることが増えました。

酒造

おいしい水と米を使ってお酒を作る仕事です。江戸期の松岡では、酒造業を許可された酒屋が16件ありました。お酒は特産品として地域の大事な産業になりました。

貸徳利　酒屋などに置かれて貯蔵用具や運搬用具として使われました。

竹細工

竹を使って竹籠や台所で使う道具を作る仕事です。これらの道具は農村の暮らしになくてはならないもので、町で売られることもありました。竹籠に石を詰めた今でいうテトラポットを造って、五領地籍を洪水から守りました。

めかご　物を入れる目のあらいかご。目笊ともいいます。

陶器

地元で取れる土を使ってお皿や茶碗などを作る仕事です。これらは地元の窯で焼かれていたようです。

松岡藩の人々のくらし

松岡の町では、武士、農民、商人、職人が一緒に住んでいて、みんながお互いに礼儀正しくすることを大切にしていました。町では、工芸や俳句などの文化も生まれました。みんなが新しい知識を学び、生活をよくするための努力をしていたので、松岡の人たちは近くの村の人たちを助けたり教えたりする大切な役割もしていました。

二代目藩主 昌平が幕府の命令で1721年（享保6年）福井藩を継ぐまでの76年間、志比堺や五領、吉野、芝原郷といった地域で日用品を売る町としてにぎわっていました。たくさんの人が物を買う場所でもあったので、とても栄えました。

しかし、藩のお金のやりくりはいつも楽だったわけではありません。他の藩では、財政が苦しくなると人々に重い税金をかけることが多かったのですが、松岡藩ではそうはしませんでした。そのかわりに、京都からお金を借りて問題を解決していました。

また、武士が農民の家の子どもたちを奉公人にするのをできるだけ控えるように指示しました。どうしても必要な場合、実家の田んぼや畑の仕事が忙しいときには帰らせてあげるようにしていました。

町では、火事が起きないように「囲炉裏改め」という制度を作り、厳しく見回りしました。そのおかげで、火事が少なく、他の藩と比べても町が苦しい思いをすることが少なかったのです。

これらの工夫は、昌勝公が人々を大切に思い、みんなから尊敬されていたことがよく表れています。

当時の食生活

町民は、地域の気候とそれを生かした農産物を多く食べていました。

葉っぱ寿司

昌勝公が油の採取のために、家々に植樹した油桐の葉っぱで、サクラマスなどを包んだお寿司です。お寿司になったのは、昌勝公が藩主になってからで、それまでは、おにぎりを葉っぱで包んでいました。

アユ料理

福井県の一部地域、特に九頭竜川などの清流沿いでは、アユ（鮎）が豊富にとれ、江戸時代からアユ料理が親しまれていました。松岡藩でも川魚のアユは、町民にとって季節を感じさせてくれる食べ物でした。

清涼山 天龍寺

天龍寺

人々の心の拠り所

天龍寺は、1653年に建てられました。松平 昌勝公は亡き祖母の「冥福」を祈るとともに、祖母への敬意を現すために建てた菩提寺です。寺の名前は、祖母（清涼）と、最初の住職がそれ以前にいた寺の名前（天龍）に由来しています。天龍寺は、曹洞宗大本山永平寺に付属する寺です。昌勝公自身が、仏教や禅宗に対して深い信仰をもっていたことに由来しています。松平家とその家臣達の寺として、約一万坪の敷地を誇る大寺院でした。地域の精神的な支えとして、また文化の発展の一環として、重要な役割を果たしたと考えられます。また、元禄2年（1689年）には、奥の細道で有名な松尾 芭蕉が訪れて句を残しています。

明治維新のころ、後継者を失い1977年まで無人でした。しかし寄付により禅修行のための僧堂（枯木堂）が建てられました。現在、天龍寺は禅宗の教えを引き継ぎ、地域住民や参拝者にとって心の拠り所となっています。座禅体験も行われており、禅宗の教えを実践する場としても広く開放しています。

松尾芭蕉の句

物書て　扇引さく　余波哉

（意味）金沢の北枝としばらく同行してきたが、いよいよお別れだ。道すがら句を書きとめてきた扇を引き裂くように、また夏から秋になって扇をしまうように、それは心痛む別れなのだ。

天龍寺御像堂

天龍寺の境内にある御像堂は、昌勝公の木像である「御像」が納められているお堂です。

昌勝公没後100年目に、天龍寺八世太梅和尚を中心に「御像」と像を置く「御像堂」の建設計画がたてられました。この製作費や建立費は松岡藩士の子孫や町民からの募金でまかなわれました。

「御像」は寛政4（1792）年に造られました。「御像」を京都の職人に注文する際は、太梅和尚と一緒に松岡在住の若者3人が同行したそうです。この旅行の記録が県立文書館に残っています。

【太梅和尚と同行した若者】万五郎 23歳、久五郎 25歳、十兵衛 19歳 その他従者2人。

以上6人が寛政3（1791）年4月未明、早朝松岡から京都に出発したそうです。

御像祭り

昔の祭りの様子

永平寺町松岡地区では、毎年8月27日と28日に「御像祭り」が開催されます。

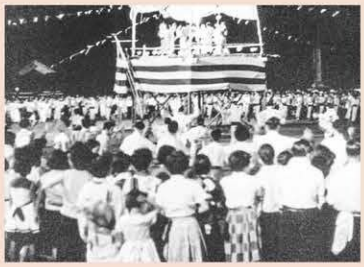
この祭りは、初代松岡藩主の松平 昌勝公の死後にも残る徳を偲んで、命日に開催されるお祭りです。祭りの日に限って、昌勝公の「御像」が公開されます。

当時の催し

子ども相撲

町の子どもたちが参加していました。子ども相撲は平成10年ごろまで開催されていました。

盆踊り



伝統能舞

能舞は松岡藩主 初代 昌勝公、二代目 昌平公 二人ともが大事に思っていました。松岡藩が福井藩に合併された後も松岡藩のお抱え能楽師は好待遇を受け、活躍したそうです。

松岡わらべ葺火能舞は、松岡地域に伝わる伝統的な能舞台です。子どもたちが能という伝統芸能を演じるのが特徴です。約800年の歴史がある能の一部を松岡に住む小中学生が演じていました。能舞を、素人の子どもが演じるのは、全国的にも珍しかったようです。NHKが3年連続で特集やニュースで紹介するほど注目されていました。わらべ葺火能舞では、舞・謡・大鼓・小鼓・笛全部を一番だけでもよいから、演じることが目標でした。

現在の祭りの様子

お祭りにこられたかたは、天龍寺境内に足を運んで参拝し、「天龍太鼓」を聴いたり、夜店や屋台を行き来し楽しみます。

天龍太鼓

天龍太鼓のはじまり

『天龍太鼓』の始まりは、昌勝公の時代に手の施しようがない病が流行った際、昌勝公の夢枕に立ったのが、「打ち鳴らす太鼓の音に舞う龍の姿」と言われています。天龍太鼓は、地域の流行り病を蹴散らしたとされ、今も御像祭りでは、無病息災と町の繁栄を祈って奉納されています。奉納される太鼓の曲目は時代とともに移り変わることもありますが、昌勝公の偉業を称えること、伝統を守ること、町の活性化を願う思いで奉納されています。現在、天龍太鼓は永平寺町の伝統芸能になっています。

この伝統芸能の保存・継承と子どもたちの健全育成を目的に、天龍太鼓の指導、練習、および演奏活動を続けています。平成10年には子どもたちの活動を支援する『天龍太鼓親の会』も結成されました。親子で和太鼓活動を続けることで、さまざまな年齢の人と交流し、心を育むことができます。さらに、地域に根ざした活動へと広がっています。

現在、天龍太鼓の元代表で、和太鼓奏者（ソリスト）の谷口 卓也さんTaiko-ist TAKUYAが監修、妹の谷口 実加さんがボランティアで子どもたちの指導をしています。小学生・中学生・高校生が毎週1回、「福祉総合センター翠荘」の地下駐車場で練習しています。

「御像祭り」では、長年にわたり奉納演奏をし、天龍寺境内では二日間にわたり祭りを盛り上げています。

チーム天龍太鼓の活動

- 福井県内外の各種イベントや祭礼での演奏
- 海外の音楽祭に出場や出演（オーストリアのウィーン市で開催された世界青少年音楽祭でウィーン市特別大賞を受賞）
- 海外の使節団派遣受け入れ
- 各施設の慰問演奏
- 学校公演、ワークショップ

御像祭り　天龍太鼓演奏

御像祭り 昼間の奉納太鼓

御像祭り 夜の演奏

天龍太鼓を伝える TAKUYA さん

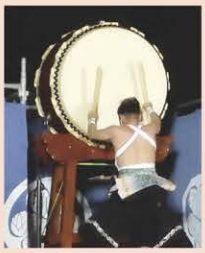
TAKUYA TANIGUCHI
谷口 卓也

photo by EitoMars

福井県出身の1983年生まれ。ドイツ・ミュンヘン在住。3歳から和太鼓に深く興味を持ち、小学校低学年で和太鼓集団「天龍太鼓」に入会。作曲および演奏活動を始める。

1999年に「天龍太鼓」の指導者となり、2002年7月には「天龍太鼓」のメンバーと共に「ウィーン世界青少年音楽祭」に招聘されウィーン市特別大賞を受賞する。2003年、和太鼓の第一人者、林 英哲の主宰する「英哲風雲の会」のプロオーディションに合格。「国際太鼓フェスティバルエクスタジア2003」に出演、プロデビューする。以降、林 英哲とともに国内外の数多くのイベントに出演し、第一線で活躍。ソロとしても歌舞伎やヨーロピアンジャズ、津軽三味線、ピアニストなどジャンルを超えたコラボレーションを展開し、和太鼓の枠にとらわれない新しいスタイルを創造し続けている。

2011年に渡独。プロ活動開始から訪れた国の数は24を超え、世界的に見ても希少なソロの太鼓奏者としてますます活動の幅を広げている。2024年4月以降は、欧州各国のオーケストラとの共演を主軸とし、世界的なコンサートホールでの演奏を視野に入れた演奏活動を本格化した。ヨーロッパから日本の太鼓文化を広める唯一無二の存在として数多くのイベントに出演。音楽での交流の橋渡しを行いながら世界で活躍する日本人太鼓奏者としての地位を確立し、2024年1月には福井県永平寺町のふるさと大使にも任命された。



松平昌勝公顕彰会（まつだいらまさかつこうけんしょうかい）

松平昌勝公顕彰会の設立

松平昌勝公顕彰会は、平成7年に有志の努力と町の補助・後援のもとに設立され活動を開始しました。松平昌勝公顕彰会は、町の歴史を理解し、県の文化遺産でもある「御像祭り」の意義を広め、継承するために作られました。この会は宗教とは関係ありません。

昌勝公顕彰会の具体的な催事については、長く続けられることを大事に考え、5つのことを決めました。

1. 顕彰式典（会長式辞・来賓祝辞・宗教色抜きの献花）
2. 子供相撲（戦前は大人の草相撲。近所はもとより、加賀や能登の力自慢が集まりました。）
3. 能舞（わらべ簑火能舞・仕舞い・舞囃子）
4. 太鼓演奏（天龍太鼓・蔵王太鼓・葵太鼓）
5. 民踊等（松岡民踊クラブ・老人会婦人民踊クラブ）

また、顕彰会設立前の活動として、他に時代行列、盆踊り大会、花火大会、行燈山車巡行、産業パレード、産業展などがありました。

今日の顕彰会の活動

現在の主な活動は、顕彰式典、奉納太鼓、昌勝公似顔絵コンテスト、小学生への出前講座などです。少子高齢化により子ども相撲や能舞は途絶えてしまましたが、「松岡音頭」を踊る民舞が復活できるよう、検討を続けています。

顕彰会のこれから

今の状況と問題点

会員の高齢化や減少、活動の縮小、地域住民の関心低下などにより、祭りは続いていますが、以前のような賑わいはなくなってきました。この状況を変えて次の世代に伝えるために努力しています。

今後の活動方針

「御像祭り」活性化のための目標

- 地域住民に歴史認識を高めてもらい、会員になってもらうための勉強会を開催する。
- 各種団体との連携を深め、祭りの集客を増やすため、多彩なイベントを開催する。

昌勝公の偉業を伝える顕彰会

現・松平昌勝公顕彰会 会長の小笠原 秀敏さんは、永平寺町、旧 松岡町に親子３代で約100年住んでいます。小笠原会長を中心として松平昌勝公顕彰会では、昌勝公の偉業や時代とともに移り行く松岡の町の姿を子どもたちや若者たちに伝えていき、御像祭りや松平昌勝公顕彰会を次の世代へと引き継いでいくために、出前授業や勉強会などを開いています。

町にのこる史跡

お館の椿（松岡藩館跡）

松岡藩館跡は永平寺町の指定史跡になっています。藩主の館があった西門に位置する場所に現在も椿の木があります。昌勝公はこの椿が好きだったそうです。

松岡藩があった永平寺町松岡地区には、天龍寺の他にも歴史的な史跡がいくつもあります。

柴神社

神社が作られたのは717年（養老元年）とされています。当時、この場所は「柴原ノ庄」と呼ばれていて、地域で一番大事な神社として「柴神社」と名付けられました。江戸時代になると、芝原の土地に福井藩松平家の館が建てられたため、1660年（万治3年）に現在の場所に神社が移されました。1704年（宝永元年）から、地域のお祭りとして「お渡り」という神事が始まりました。これは、神輿や手鉾を持って町を練り歩くもので、城下町をにぎわせました。1871年（明治4年）に神社の名前は「春日神社」から元の「柴神社」に戻されました。その後も、境内の整備や建物の建設が進められ、現在では「お渡り」の神事も復活して毎年行われています。

柴神社は地域の歴史や文化に深く結びついた大切な存在です。地域の人々の信仰によって支えられ、今も大切に守られています。

松岡古墳群

福井平野を一望する丘陵に紀元3～7世紀にかけてつくられた古墳約50基が点在しています。その内4基の前方後円墳（手繰ヶ城山古墳、鳥越山古墳、石舟山古墳、二本松山古墳）は国指定史跡に指定されています。当時の豪族や有力者が埋葬されていたと考えられ、多くの副葬品が発見されています。

火薬局跡

安政年間のペリー来航による国防意識の高まりから、火薬製造所（火薬局）が建設されました。火薬製造所の計画を進めたのが、後の由利公正らでした。

春日山古墳

県指定の文化財で松岡公園入口近くにあります。1953年（昭和28年）に公園を整備する工事中に発見されました。1992年（平成4年）の発掘調査で丸い形をした直径約20mの円墳とわかりました。

摂取寺

摂取寺は、奈良時代後期で780年ごろ建てられたとされています。秘仏「馬頭観音菩薩像」が収められています。

編集後記

松平昌勝公顕彰会
会長　小笠原　秀敏

「御像祭り」は、松岡の子どもたちにとって夏休み最後の娯楽であり、青年にとって出会いや再会の場であり、地域住民にとって親戚・知人のおもてなしの集まりの場であり、地酒に川魚（主に鮎料理）や葉っぱ寿司などの郷土料理に舌鼓を打つ200年以上続いているお祭りです。しかしながら、この「御像祭り」と「松岡」に関する歴史的史実を知る住民の方があまりにも少なくまた、少なくなりつつあります。

先日、松岡中学校の３年生の集う会に参加した際に、96名の生徒に「松岡」の地名の由来を聞いたところ、ほとんどの生徒は理解していませんでした。驚くべき認知度の低さです。いかに学校及び社会教育の中で、地域の地理・歴史の教育がなされていないかが伺えます。現状を鑑みると教材の古さや少なさ及び教育者（伝承者）の少なさ、また学べる機会の少なさが、地域の歴史や現在・未来の把握をする住民の少なさに拍車をかけているのではないのでしょうか。

さてこの度、文化庁の補助事業「地域文化財総合活用推進事業」で私共の「松平昌勝公顕彰会」が主な事業として行っている「御像祭り」が地域伝承事業の補助金対象となり、記録映像及び記録冊子の作成をすることができました。

この「人々に慕われた　松平昌勝公」は、「松岡藩」の成り立ち初代藩主「松平昌勝公」の人となりや、城下町の成り立ちや藩政・産業・住民の暮らしが良く理解でき、「松岡」地名の在り方や「御像祭り」の由来や伝承すべき訳が老若男女問わず学べる冊子になっていると思います。

近年、地域社会の構造変化や少子高齢化が進み、地域文化の伝承が途絶えつつあります。御多分に漏れず「御像祭り」も伝統行事がいくつか途絶え、顕彰会の関係者も減少に喘ぎ、地域文化の伝承の困難を危惧している状態です。今後、この冊子を活用した社会教育が広がり、「松岡」地区の地域文化の伝承の輪が大きく広がって、多くの人が松岡の歴史に学び、未来の創造に繋げてくださったら幸いです。

参考資料

・民俗資料展
・松岡の鋳物
・松岡藩藩政展
以上、松岡町教育委員会発行
・松平昌勝公顕彰会様提供資料
・昌勝公顕彰会 会長様 提供資料
・十二曲り散策ご案内（永平寺町発行）
・天龍太鼓様 提供資料
・清涼山 天龍寺HP
・福井の文化財HP

人々に慕われた松平昌勝公

2025年3月　発行
発行者／松平昌勝公顕彰会
編集・制作・印刷／株式会社エクシート

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

本事業は令和 6 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）の補助を受けて実施しています